壷内　卓氏　壷内タオル株式会社　代表取締役

壷内　卓氏

1923年創業の壷内タオル（株）の3代目が今回の「タオルびと」である。「ここにしかないタオルを」をスローガンに掲げる壷内タオルは、糸商として産地内の原糸調達が本業であるが、2001年からオーガニックコットンに徹底してこだわった自社ブランド「Plantia」を立ち上げ、タオル製造にも関わっている。きっかけは、ある人物との出会いとパキスタンに原糸の買い付けに出かけたときに見た、ある光景にある。「つくる人も使う人もみんなやさしくなれる。」そんなタオルづくりが壷内氏の目標であり、環境問題に対して「タオル」からできることを実行し、挑戦しつづけている。

つぼうち・たかし　☆　1956年２月、愛媛県今治市共栄町生まれ。今治市立常盤小学校、今治市立日吉中学校、愛媛県立今治西高等学校をへて、1974年４月に立教大学法学部に入学。大学を卒業後、1978年４月に（株）百十四銀行に入社。百十四銀行では株式や債権などをとり扱う証券部門でキャリアを積み、1990年に同行を退職して帰今。そして、家業を継ぐために壷内タオル（株）に入社。2002年３月に３代目として代表取締役に就任。1993年からオーガニックコットンの供給をスタートさせ、2001年にはオーガニックコットン 100%の自社ブランドを立ち上げた。農薬を大量に使って栽培される綿花が広く流通するなかで、環境にやさしいタオルづくりを目指して奮闘している。

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

１．　幼少青年時代

やんちゃな少年時代

壷内卓氏は、1956年２月11日、今治市共栄町に父・正明氏と母・ステ氏との間に末っ子長男として生まれた。上には姉２人、7歳上の長女・洋子氏と４歳上の次女・満由美（まゆみ）氏がいる。父親の正明氏は、壷内タオル（株）の２代目としてタオル製造業に従事し、1977年からタオル原糸を供給する糸商として産地内分業を担った。ステ氏は、今治市大島の出身で、家業の農家を手伝っていた。

壷内氏は、1962年４月に今治市立常盤小学校に入学した。幼少時代の壷内氏は、明るくやんちゃな性格だった。当時の少年たちに人気だったプラモデルに凝った時期もあるが、警察署が主催する近くの剣道教室で剣道をはじめ、少年剣士として練習に励んだ。1968年４月、今治市立日吉中学校に入学し、しばらくは剣道をつづけたが、夏は汗だくで不衛生な環境で練習し、冬は寒いなか裸足で練習し、多感な壷内少年にとって剣道はだんだんと魅力的でものではなくなった。加えて、「段取得者になると木刀で構え、型が始まるんですよ。それは僕にはできんやろう」とおもって、１級を取得した時点で剣道に一区切りをつけた。

中学を卒業後、1971年４月に愛媛県立今治西高等学校に入学した壷内氏は、友だちに誘われて水泳部に所属した。半年ほど練習に打ち込んだが、途中からマネージャーに転向してメンバーを支える黒子の役割を担うようになった。自由な校風のなかで、高校時代は勉学も部活も自分のペースでゆっくりと過ごせた。いよいよ進学を考える３年生を迎え、最初は京都にある同志社大学を第一志望としていた。ところがある日、友だちが「俺、ここ受けるんや」と言って、東京にある**立教大学**のパンフレットを見せてくれた。「すっごいきれいな大学やな」と一目惚れし、結局立教大学への進学を決めた。

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

立教大学池袋キャンパス本館

（１号館／モリス館）

1974年３月に今治西高校を卒業し、同年４月に立教大学法学部に入学した。法学部を選んだ理由は、人文・社会系科学のなかで文学や経済には興味がなかったので、消去法で法学部を選んだ。東京での４年間の大学生活はそれなりに刺激的なものだったが、４年間に３回の引っ越しをしたことが思い出にある。

上京して最初は、夢だった電車通いをするため大学から少し離れた杉並区に半年ほど住んだ。物件は父親が見つけ、大家とおなじ屋根の下の一軒家だった。充てられた部屋は６畳一間で、田舎暮らしに慣れていた壷内氏にとって「こんな狭いところに居れんわ」というのが正直な感想だった。

１回目の引越しは、高校時代の友だちが近くに住んでいるという理由で、練馬区江古田に１年ほど居住した。ここも大家と同居の一軒家だった。しかし、住んでみて何かしっくりいかない。江古田から立教大学のある池袋まで電車で５分くらいであり、壷内氏のなかでは最優先事項であった電車通いの醍醐味を味わうことなく、目的地に到着してしまう。大学からあまりにも近過ぎた。

練馬大根

（写真提供：ねりま観光センター）

そこで２回目は、いよいよ一人暮らしを目論み、練馬区中村橋で１年間を過ごした。当時、中村橋の周辺は**練馬大根**をつくってい

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

る畑が一面に広がっていた。真言宗豊山派の南蔵院近くにあった「長寿庵」という蕎麦屋の 2 階を間借りして一人で住む予定だったが、蕎麦屋の従業員と一部屋ずつ分けて住むことになり、完全なる一人暮らしとはならなかった。

そして 3 度目の正直で、憧れの世田谷区八幡山にたどり着いた。八幡山から池袋までは、京王線と山手線を乗り継いで電車でおよそ40 分かかる。車窓から東京の風景を眺めながら、十分に電車通学を満喫できた。「ここはもう最高でしたね。一人暮らし用のアパートで居間と台所の二間。風呂はなかったですが、近くに銭湯がたくさんありました。」1970 年代のアパートは風呂なしが主流だったため銭湯通いは日常であり、1973 年に発売された「神田川」の歌詞にあるように、学生にとって銭湯は青春をあらわす枕詞であった。

引越しつづきで慌ただしい 4 年間であったが、大学生活で 3 回も東京都心内で居場所を転々としたことは稀有な経験であり、東京暮らしを納得のいくまで味わうことができた。

銀行マンとしてキャリアを積む

大学 4 年生になり、父親の正明氏からは「お前は今治に帰ってこなくていい」と言われ、壷内氏は就職活動をはじめた。「父親はわりと先進的な人間でハイカラでしたね。古いしきたりとかあまりうるさく言わず、事業を継ぐように言われたことは一度もないですね」と壷内氏。

時代は 1970 年代の安定成長期とは言え、第二次石油ショックの前兆で就職戦線は買い手市場だったため、他の学生と同様に壷内氏も内定を得るまで苦労した。しかし、当初は「ロマンがない」と活動対象に挙げていなかった金融業界から内定を得て、1978 年 4 月に（株）百十四銀行に入社した。1878 年に設立された同行は、日本の近代化を象徴する歴史ある銀行のひとつである。

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

2024年度に新一万円札の顔になる**渋沢栄一**は、日本の経済発展には近代的銀行業の誕生が急務であるとしてその準備にあたり、1872年に「国立銀行条例」が制定された。その後1876年の第一回目の改正をへて、新たな国立銀行条例のもとで百十四銀行の前身となる第百十四国立銀行が設立された。「国立」とあるが歴とした株式会社の形態をとり、全国の有志によって最終的には153の「国立銀行」が各地に設立された。国への届出、認可順に会社の名称に番号が付与され、最初に認可された第一国立銀行（現・みずほ銀行）から第二国立銀行、第三国立銀行とつづき、第百十四国立銀行は文字どおり114番目に国に届出、認可を受けた「国立銀行」であった。近代的銀行業は日本の工業化を人・モノ・カネの経営資源のうちカネの側面から支え、新しい産業として紆余曲折をへながらも一大産業に成長していく。第百十四国立銀行も例外ではなく、他銀行との吸収合併や戦争による被害などを経験しながらも存続し、1948年に現在の（株）百十四銀行となり現在に至っている。

「日本の資本主義の父」と呼ばれる

渋沢栄一

（深谷市所蔵）

壷内氏は、入社してすぐに今治支店に着任し、その後高松本店、東京支店を経験した。高松に勤めていた1980年に、今治西高校の同級生だった香保利（かほり）氏と結婚し、長女の美都（みさと）氏と長男の良太氏の二人の子宝に恵まれた。百十四銀行での勤務は12年間におよび、前半の６年間は営業で外回りを経験し、後半の６年間は証券部門に配属されて株式や債権（とくに国債）の取扱いに従事した。銀行での経験は、経営者になって大いに役立っている。

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

三井淳生「第百十四国立銀行盛業の図」

（百十四銀行 HPより引用）

銀行員として順調に仕事をこなしていたが、ある日、正明氏から母親が体調を崩したとの連絡が入った。そのとき、正明氏から一言も「今治に帰ってきてほしい」とも、ましてや、「会社を継いでほしい」とも言われたことはない。ただ、母親がいなければ何もできない父親を心配して、今治に帰ることを考えはじめた。そこで、香保利氏に相談したところ、すぐに快諾してもらえた。二人とも今治市出身であり、帰今に抵抗はなかった。壷内氏は香保利氏の賛同と協力を得て、今治に帰って壷内タオルを継ぐ決意をした。

（次号につづく）

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.